3　県北広域都市圏の将来像と都市づくりの方針

（１）目指す将来像

悠久の歴史が息づき、人・田園・自然が共生する、ゆとりの田園都市圏づくり

・周防灘沿岸の広大な田園風景を残し、山や田園、海や河川と溶け込んだゆとりと潤いのある快適な都市圏づくりを目指します。
・多極分散型の市街地配置を継承し、機能上のネットワークを構成する都市構造を構築し、安心して生活できる都市圏を目指します。

（２）都市づくりの基本的な考え方

①　圏域構造の考え方

圏域構造の概要

・中津平野を横断する国道 10 号、国道 213 号、県道中津高田線と計画中の東九州自動車道、中津日田道路、宇佐国見道路（候補路線）を都市間交流軸とします。
・中津、宇佐、豊後高田の既存市街地を多極分散型構造における都市核として市街地の集約を図ります。
・都市間交流軸沿いでは、ある程度の宅地の立地を許容し、周辺の田園景観と調和する低層・低密な市街地の連担軸を形成します。
・市街地の周辺部の広大な田園景観を保全し、さらにその周囲を周防灘沿岸部の海岸と背後の山地の自然で取り囲みます。

各都市の役割

・中津市は、他都市との連携を強化し、多様な分野での圏域の中心的役割を果たします。
・宇佐市、豊後高田市は、田園環境や歴史・文化資源をいかしたゆとりとうるおいのあるライフスタイルや、豊富な観光資源を活用した都市の形成を図ります。

②　土地利用の考え方

・平坦地が多く、現在の農地と宅地が混在していることを踏まえ、無秩序な宅地化を抑制するとともに、宅地の集約化や土地利用の純化を進め、周辺の田園環境と調和した市街地の形成を図ります。
・商業と観光の一体的な振興を図りつつ、周防灘のなだらかな海岸線、平地部の広大な田園、背後の丘陵地、山地などの自然・田園と調和する魅力的・機能的な都市づくりに資する土地利用を進めます。
・中津港や大分北部中核工業団地などの主要な工業集積地があることから、企業ニーズを把握しながら、産業振興に向けた適切な土地利用を検討します。
・災害リスクの高い区域においては、施設立地の抑制や災害対策の充実など、適切な土地利用の転換を図ります。

③ 都市施設の考え方

・都市軸の交流を支える基盤として、国道 10 号、県道中津高田線の整備を行います。また、東九州自動車道、中津日田道路の整備促進、宇佐国見道路の事業化の推進に取組みます。

・大型企業立地に対応するため、中津港の機能強化とアクセス道路の整備を進めます。また、小祝鍋島線などの都市間を連携する道路の整備を進めます。

・路線バス及びデマンド交通などを確保・維持し、誰もが各拠点間にアクセスできる公共交通ネットワークを構築するとともに、情報通信技術を活用した交通需要マネジメント、自動運転や次世代型の自動車のシェアリングシステムなど、新たな交通システムの導入について関係機関と連携して検討を進めます。

・海岸線や河川の保全を行い、親水性を高めるとともに田園環境や山間地の自然、宇佐神宮などの地域資源を活用した拠点づくりや都市公園の整備を進め、海・田園・山間に広域的に広がる水と緑のネットワークづくりを目指します。

④ 自然環境保全の考え方

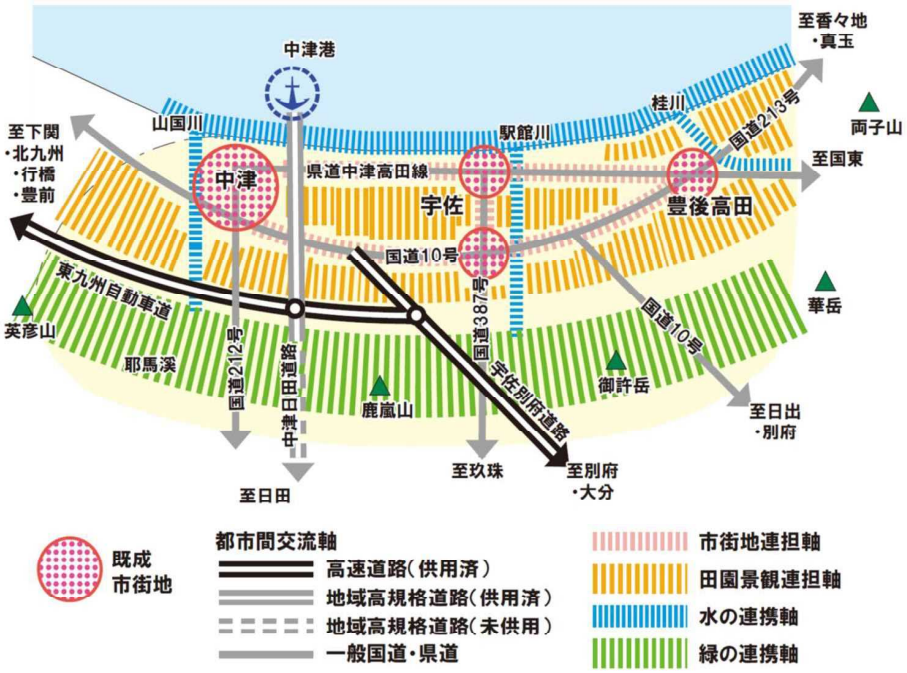
・周防灘の海岸線や山国川、駅館川、桂川などの河川、両子山や華岳、御許山、鹿嵐山、英彦山などを中心とする山地や丘陵地、平地部の田園について、各都市計画区域の状況を考慮しながら広域的な保全を図ります。

・水辺空間や山地による美しい景観を保全・形成するとともに、市街地における公園整備や市街地内農地の保全、グリーンインフラの取組を推進します。

⑤ 都市防災の考え方

・本都市圏は、北側を周防灘に面し、周防灘断層帯をはじめとした津波による被害が懸念されます。また南側を山地に面した市街地では土砂災害が懸念されます。

・このような区域では、ハード・ソフトの施策を柔軟に組み合わせて、多重防御による安全性の確保に努め、強靭な県土づくりを持続的に推進します。



■県北広域都市圏の圏域構造図